

情報発信・教育活動の充実

評価の作成者： 広報室

## 積極的な情報の発信

### 計画：

平成16年から運用が開始されたインテルサットの活用その他、インターネットのホームページ等多様なメディアを利用し、研究者への観測データの提供のみならず、国民に対して南極地域観測事業の活動や成果、及びその意義について、観測の現場である昭和基地から積極的な発信を行う。

特に、平成18年秋から平成19年初頭には、我が国の南極地域観測事業が50年目を迎えることから、これまでの成果も含め南極地域観測事業への国民の理解を増進する機会として活用する。その一環として企画されている「南極展」への積極的な協力を行う。

さらに、平成21年の「しらせ」後継船就航を契機に、多様な報道関係者やサイエンスライターの南極への同行を図るとともに、観測隊からの積極的な情報発信を可能にする体制の整備を行う。

### 実績・成果：

インテルサットを活用した昭和基地からの情報発信は、年間約30～40回実施する「南極教室」の他に観測隊の同行者として現職の教員を南極に派遣し、昭和基地から日本の児童、生徒に向けた授業を行う「教員南極派遣プログラム」を新たに実施した。

ホームページでは、越冬隊の活動を伝える「昭和基地NOW」を逐次更新し、夏期の活動を伝える「進め！しらせ」、「野外調査隊はどこ？」では、毎日情報を更新し、ほぼリアルタイムに近い活動情報の提供を実施した。また、TV会議システムを利用して昭和基地と国立極地研を結び、観測隊長等による観測行動や観測成果等についての記者会見を行った。

「南極展」は、「ふしぎ大陸南極展2006」として国立科学博物館において、51日間開催し、この間22万人を終える見学者が来場した。この他、南極観測50周年事業としてオープンフォーラム南極の開催、50年史編纂等その他、国内の著名人を南極に派遣し、南極レポートをTV会議システムを利用して国内や外国向けに発信した。

報道各社からの取材提案を公募し、取材クルーを南極に派遣する取り組みが、南極本部によって企画され、これにより派遣されたチームが撮影した映像は、帰国後、多様なメディアから情報発信されている。

これまで、情報発信については、観測隊員の業務としての分担が明確になっていない部分があったが、越冬隊及び夏隊の庶務担当隊員が業務として担うことで、観測隊の中での仕組みが整った。



図1 「南極教室」実施の様子（昭和基地）



図2 「南極授業」実施の様子（日本国内）

しかし、多様な同行者を派遣するために必要な現地での活動に係る安全管理等の仕組みの整備は進んでいない。

当初計画にはないが、平成21年度に立川に移転後は、研究所の一般公開(オープンキャンパス)を開催し、地域への情報発信を行い、一日の来場者は3,000人を超えた。

また、南極や北極での観測事業や観測成果、研究成果等を発信する施設として、平成22年7月に「南極・北極科学館」を開館した。平成23年3月現在の来館者数は、約25,000人となっている。



図3 一般公開(-50度低温室探検ツアー)



図4 国立極地研究所南極・北極科学館

**実績・成果が計画に照らしてどの程度得られたか：**

- 計画以上あるいは、完璧に近い実績・成果を得た。
- 計画通りの実績・成果を得た。
- ほぼ計画通りで、十分な実績・成果を得た。
- 計画が不備であったため、実績・成果が不十分であった。
- 天候等不可抗力による理由で、実績・成果が不十分であった。

**上記の判断をした理由**

多様な同行者を派遣するために必要な現地での活動に係る安全管理等の仕組みの整備(この評価作成部署では、関わるができない)が進んでいないことにより、計画にあるサイエンスライター等の派遣が実施されていないため。

しかし、この点を除けば、計画にある事項は「計画以上あるいは、完璧に近い実績を得た。」

## 教育の場としての活用

### 計画：

国立極地研究所においては、南極を大学院学生等の高等教育の場として積極的に活用し、大学院教育の高度化、後継研究者の育成を目指す。特に、極地観測が野外科学の訓練の場として非常に重要であることを認識し、現地教育カリキュラムの整備を含めた大学院生派遣方策の改善、テレビ会議システムを利用した南極からの授業の確立等を図ることとする。

また、昭和基地と日本の小中学校の教室等を、インテルサットの常時回線を活用してリアルタイムで直接結ぶ「南極教室」を引き続き行う。この際に観測業務に支障が生じることのないように十分留意する。さらに、IPY2 007-2008を契機として企画された「中高生南極北極オープンフォーラム」を通じて出された中学生、高校生からの実験・研究の提案のうち可能なものについて、南極地域観測隊が南極において実施する。これらにより、次代を担う青少年が極地に関する学習を通じ地球や環境への理解を深めることが期待される。

一方、IPY2007-2008の教育・アウトリーチプログラムの一つとして、国際南極大学構想(IAI)がある。この計画は、極域科学の様々な分野でリーダーシップを発揮すると同時に、即戦力となるような、フロンティア精神に富んだ学生を育成することを目的としている。そのために、南極において、広範な学問領域の大学院カリキュラムを国際共同の下で運用するものである。我が国としても、積極的にIAI構想に参画し、国際感覚を身につけた大学院学生の養成を図るとともに、外国の大学院学生を受け入れ、国際的に開かれた南極観測とする必要がある。特に、我が国の南極地域観測事業の中核機関である国立極地研究所は、総合研究大学院大学の基盤研究機関として、複合科学研究科極域科学専攻を担当しており、関係する大学等と連携を図りながら、積極的にIAI構想を推進して行くことを期待する。

### 実績・成果：

総合研究大学院大学極域科学専攻(以下、総研大)をはじめとする国内の大学から、大学院学生が48次、49次、51次南極観測に参加し、自らが取得したデータや試料を用いた研究活動が積極的に行なわれた。南極観測による研究成果をまとめた論文が学術雑誌に掲載され、学位論文提出に至っている。また、野外観測への参加によって、研究者として必要なことを準備段階から習得できる貴重な体験を積む機会になっており、フィールドサイエンティストとしての高い研究能力を有する研究者養成に貢献している。新船就航に伴い隊員・同行者の参加枠が増し、従来より多くの大学院生の参加が実現している。

「南極教室」に加え現職の教員を南極に派遣して実施する「南極授業」を新たに開始した。

これまで実施してきた「中高生南極北極オープンフォーラム」を見直し、「中高生南極北極科学コンテスト」と「南極北極ジュニアフォーラム〇〇(年号)」として、これまでの意図を引き継ぎ実施している。平成21年度には32校から128件の提案があり、受賞した提案のうち、2件を南極で1件を北極で観測や実験を行った。

IAIの推進については、国内における冬季野外実習の参加、支援および講義を他大学との連携の下で実



図1 中高生南極北極科学コンテスト(受賞提案発表)



図2 中高生南極北極科学コンテスト(質問する参加者)

<p>施し、南極観測の発展、後継者育成に貢献している。南極観測が従来から国際共同の下で実施されていることから、昭和基地方面の観測に参加する外国人研究者との交流の他、セール・ロンダーネ方面をはじめとした様々な観測拠点においては、他国の研究者や技術者と行動を共にすることで、研究面のみならず、その背景や基盤に関連する知識や思考を学ぶ機会になっている。また、IPY2007-2008 にも呼応して、極域科学研究の魅力を次世代に伝え、発展させていく上でも、国内外の大学、研究機関との連携を一層強化するための基盤構築が進められた。</p>	
--	--

<b>実績・成果が計画に照らしてどの程度得られたか。</b>
<p><input type="checkbox"/> 計画以上あるいは、完璧に近い実績・成果を得た。 <input checked="" type="checkbox"/> 計画通りの実績・成果を得た。 <input type="checkbox"/> ほぼ計画通りで、十分な実績・成果を得た。 <input type="checkbox"/> 計画が不備であったため、の実績・成果が不十分であった。 <input type="checkbox"/> 天候等不可抗力による理由で、実績・成果が不十分であった。</p>
<b>上記の判断をした理由</b>  「中高生南極北極科学コンテスト」に限っては、「計画通りの実績を得た。」